

末摘花の二面性

——晴れと褻——

岩 坪 健

はじめに

源氏物語に描かれた人物のなかで、異色の存在である末摘花に関する論文は頗る多い。論点は多岐にわたるが、とりわけ末摘花が初めて登場する巻（末摘花）と、その次に現れる巻（蓬生）との描き方の相違が、以前から問題にされている。末摘花はそれ以後の巻々（玉鬘・初音・行幸・若菜上）にも点描されるが、その描写は末摘花の巻と同じで、蓬生の巻のみ異なる、と見なされている。末摘花の巻を第一部、蓬生の巻を第二部、それ以降を第三部と分けると、

末摘花の物語の三部構成が、滑稽極まりない醜女の物語、困窮の中で古風な変わらぬ心のまま源氏を待ち続けるけなげな女君のそれ、そして再び愚弄的となる滑稽な醜女のそれ、というふうに大きな振幅を見せる⁽¹⁾

と、指摘されるとおりである。本稿では、第二部だけが別人のように見える謎について、新しい視点からアプローチ

末摘花の二面性

を試みる。また第三部は、果たして第一部と同じであるかどうかについても検討する。

一、話し相手と話題の相違

末摘花・蓬生の両巻における末摘花の描かれ方の相違に関しては、たとえば次のようにまとめられる。

末摘花巻に於る姫君は、源氏が暗闇の手さぐりではじめての夜をともし過ごしたときのように、至つて人柄が要領をえないで、口も殆んど開かないのであるが、蓬生巻になると口の重いのは変わる筈もないのに、言うべきことは確かに言い、心に叶わぬことは決して許さない強靱な態度を示すのに驚きを感じることもある。旧き正しき道を守つて少しもたじろぐところがない。叔母のあくの強い性格と正面から衝突して、一向にひるまないだけの性格がこの巻では姫君に付与されているのである。末摘花巻にもこの性格の一端は語られはしたが、蓬生巻では姫君の性格や考え方自体が物語の中心に座を占めている⁽²⁾。

たしかに読者が「驚きを感じる」ほどの変貌である。ただし右記の文章にも書かれているように、末摘花と話す人物が両巻では異なることを考慮しなければならぬ。末摘花の巻で無口だったのは源氏に対してであり、蓬生の巻で雄弁になるのは叔母に対してである。そのうえ源氏と叔母とでは、話題も異なる。このように話す内容と相手の相違を区別せず、一律に比較検討する従来の方法には問題がある。

男性とは文通さえ経験のない末摘花がはじめて源氏を相手とする体面の場に身を置く状況は、後者（稿者注、蓬生の巻）において馴れ親しい侍女や無教養で俗悪な叔母を相手に会話する場面とは、同次元に読まれるべきでな

し。⁽³⁾

と指摘されたとおり、深窓の姫君にとって相手が男性か女性か、身内か他人かで、話しやすさや態度が変わるのは、至極当然のことである。そこで以下、その点に留意して、論を進めることにする。

二、末摘花の人柄

まず、末摘花の性格を確認しておく。かの君が引つ込み思案であることは、源氏に末摘花を紹介した命婦が述べている。

「いでや、さやうにをかしき方の御笠宿かさどりにはえしもやと、つきなげにこそ見えはべれ。ひとへにもものづつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ人になむ」と、見るありさま語りきこゆ。(末摘花、276頁)⁽⁴⁾

「ただおほかたの御ものづつみのわりなきに、手をえさし出でたまはぬとなむ見たまふる」と聞こゆれば、(同、277頁)

男君との洒落た会話や文通ができないのは教養がないからではなく、極度な「ものづつみ」のため人見知りをするからである。たとえば源氏への返事を書くように女房たちに勧められても、

あさましようものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに(源氏の手紙を)見も入れたまはぬなりけり。(同、279頁)

と、この箇所にも過度の「ものづつみ」とある。そのため源氏の手紙を見ないのは失礼にあたるという思慮よりも、弱腰な態度が優先してしまうのである。

蓬生の巻においても、この「ものづつみ」は変わらない。たとえば琴を弾きに来てほしいと叔母に誘われ、また乳母子の侍従に催促されても断っている。

人にいどむ心にはあらで、ただこちたき御ものづつみなればさも睦びたまはぬを、ねたしとなむ思ひける。(蓬生、333頁)

叔母は末摘花の態度を、自分に対する反発・反抗と捉えているが、末摘花には別に意地を張っているのではなく、単に甚だしい「ものづつみ」のせいである。以上の例すべてに「ものづつみ」が見られるように、末摘花は一貫して、最も親しい女房たちの勧誘にさえ応じられないほどの恥ずかしがり屋なのである。末摘花と蓬生の巻では末摘花像は異なる、と言われている。しかしながら両巻を通して、「ものづつみ」は変わっていない⁽⁵⁾。

この性格は、親の躰によると考えられる。

親のもてかしづきたまひし御心おきてのままに、世の中をつつましきものに思して、まれにも言通ひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、(蓬生、331頁)

親の教育方針が娘の人格を形成して、親の死後も遺訓が墨守されているのである。ただし、このような人間関係、とりわけ男女関係に消極的である態度は、末摘花だけではない。程度の差こそあれ、朝顔の斎院、宮の御方(蛸宮と真木柱の娘)、宇治の大君にも共通していて、これは「宮家の格式と薫染によるもの」⁽⁶⁾と考えられる。そのため男性、特に懸想する男君に対しては尻込みしてしまうのである。では、源氏に対する末摘花の態度も、いつも「ものづつみ」のため同じであろうか。次節で調べてみよう。

三、末摘花の源氏への対応

まず、源氏が手紙を送り、その返事を書くように女房たちに勧められても、

あさましうものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに（源氏の手紙を）見も入れたまはぬなりけり。（末摘花、279頁）

であった。末摘花にとつては、返書をしないという失礼さよりも、遠慮の方が勝ってしまうのである。次に源氏が物越しに話しかけても、「近き御答へは絶えてなし。」（同、283頁）と、梨の礫である。見かねた侍従が代詠したものの、そののち源氏が何を言っても「何のかひなし。」（同、284頁）と、だんまりを決めこんでいる。これは頑なに親の遺戒に従っている、とも解釈できる。

ところが、八月に源氏と契りを結び、後朝の文が届くと、返歌は侍従の代作であるが、女房たちに「口々に責められて」（同、287頁）、代筆ではなく自ら筆を取った。それまで女房たちに催促されても、拒み続けてきた態度とは異なる。これは源氏を婿にした時点で、結婚拒否の遺訓が破られ、もはや消極的では済まされなくなつたからであろう。

それから数ヵ月後の雪の夜、再び源氏が訪れ、例の無口をなんとかしよう、あれこれ話しかけると、

いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへる（中略）さすがにうち笑みたまへる気色（同、294頁）

であった。まだ源氏に慣れず緊張しているとはいえ、「うち笑み」の余裕が生じている。そして源氏は帰り際に和歌を詠んだが、その反応は、

ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなる（同、294頁）であった。この箇所を、末摘花の愚鈍と捉える見方もあるが、

末摘花巻における彼女が歌に閑して無知無能であったと見るのは誤りであろう。男との艶なる歌の贈答経験はなかったもので、源氏に相対して当意即妙な返歌は無理（注(3)の論文）

と解釈すべきであろう。親の教訓に背いて結婚してから、まだ数ヶ月しか経っておらず、その間に男君との接し方を消極的から積極的に変えるのは至難の業である。

口頭での即答はできなかったが、その年の年末、源氏に衣を贈るときは、自作の和歌を自ら書いて添えている。そして翌年の一月七日の夜、源氏が訪問すると、末摘花の屋敷は源氏の経済的援助を受けて世間並みになっていた。末摘花もまた、「すこしたをやぎたまへる気色もてつけたまへり。」（同、303頁）と、変化が見られる。翌朝、源氏が、

「今年だに声すこし聞かせたまへかし。待たるものはさしおかれて、御気色のあらたまらむなむゆかしき」と、声をかけてせがむと、末摘花は、

「さへづる春は」とからうじてわななかしいでたり。（同、304頁）

と、初めて源氏に口をきいた。今まで源氏に身構えてきた末摘花にとって、これが精一杯の返答であり、以前の「むむ」としか言えなかったときよりは緊張がほぐれている。やっとの思いで口に出したのが「さへづる春は」だけか、と非難するのではなく、末摘花の勇気を称えたい。しかも兩人とも、古歌を踏まえて話している。

古歌の贈答に支えられる後朝の別れは、この物語に登場する人物の資格を保証する。（注(3)の論文）と見て、高く評価すべきである。

次いで蓬生の巻では、源氏の詠歌に対して、きちんと返歌を口ずさめるようになった。それに関しては、どの研究者も賞賛している。ただし、変貌したというよりは、源氏に慣れて成長したと見るべきであろう。

次に源氏と対面するのは、初音の巻である。ここでの末摘花は、よく話している。

御声などもいと寒げに、うちわななきつつ語らひきこえたまふ。見わづらひたまひて、「(以下、源氏のセリフ)」と聞こえたまへば、こちこちしくさすがに笑ひたまひて、「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、

衣どももえ縫ひはべらでなん。皮衣をさへとられにし後寒くはべる」と聞こえたまふ(初音、154頁)

寒さに震えながらも話している点、そして源氏の問いにはつきり答えている点、しかも高貴な女君ならば話題にしないことまで述べている点に注目したい。もはや源氏に遠慮してはにかむ、昔の面影はない。源氏の目の前にいるのは、寒さをストレートに訴える女性である。また、ここでの「さすがに笑ひたまひて」は、以前の「さすがにうち笑みたまへる気色」や「ただ「むむ」とうち笑ひて」とは異なる。かつては精一杯のお愛想や照れ隠しであったが、ここでは打ち解けて何でも話せる源氏への苦笑である。

通説では、蓬生の巻では賞賛された末摘花が、それ以後は元に戻り、末摘花の巻と同じく嘲笑的になる、と見なされている。しかしながら源氏との対話に限定して見ていくと、少しずつ源氏に打ち解けていく過程が窺える。そして、ついに初音の巻で遠慮なく話せるようになったのは、源氏を「うちとけ頼み」(初音、154頁) 全幅の信頼を置くようになったからである。これに対して源氏は、「心うつくしといひながら、あまりうちとけ過ぎたり」(同前)と思いなながらも、こまめに面倒をみている。末摘花の巻では源氏が末摘花に対して打ち解けてほしいと願っていたことを思うと、初音の巻では立場が逆転している。これを最後に、二人の対面は描かれなくなる。源氏は末摘花の明け透け

な態度に嫌気が差して、会う気がしなくなったのかもしれない。

四、末摘花の女性への対応

今度は、末摘花と女性との対話について、巻の順に見ていくことにする。最初の相手は、源氏を手引きした命婦である。末摘花は命婦に琴の演奏を所望されると、

「聞き知る人こそあなれ。もしきに行きかふ人の聞くばかりやは」（末摘花、268頁）

と、きちんと返事している。源氏に対する対応とは、雲泥の差である。しかも「聞き知る人」は、伯牙の故事を踏まえた次の古歌を引用している。

琴の音を聞き知る人のありければ今ぞたち出でて緒をもすぐべき（古今和歌六帖）

このように故事・古歌を織り交ぜた、風流な会話ができるのである。この返答からも、末摘花は愚鈍な人ではないと言えよう。従来の研究では、末摘花の不器用さばかりがクローズアップされてきた嫌いがあるが、それは専ら源氏に接するときである。源氏とはろくに会話ができない時点においても、馴染みの命婦とは気楽に気の利いた会話が交わせることを見逃してはいけない。「聞き知る人こそ」云々は、末摘花が最初に発する言葉であり、それを一番初めに置いた作者の意図を汲み取るべきである。

次に末摘花が話す相手も、命婦である。源氏が物越して話しかけるのを聞くように、と命婦に言われると、末摘花は、

いと恥づかしと思ひて、「人にも聞こえむやうも知らぬを」とて奥さまへゐざり入りたまふさま、いとうひうひしげなり。(末摘花、280頁)

と、奥に引つ込んでしまふ。話し方が分からない、というのは本音であろう。親から、男性との接し方を教わっていないのである。ということは、極度の恥づかしがり屋というレッテルを貼るのではなく、親の遺戒に従い、自分の気持ちを素直に述べた、と好意的に解釈できよう。

しかしながら、両親がいよいよ今となつては、男君のお相手もしませんと、と命婦に教えられると、

さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、「答へきこえて、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。(同、281頁)

と、条件を提示して従っている。とはいえ自分の考えを明言している点に注目したい。源氏に対してだんまりを決めこむ態度とは、まったく異なる。

命婦の提案に素直に従う従順な人柄は、別の場面にも見られる。源氏の後朝の文に対して、侍従の代作を書くようにと、女房たちに「口々に責められ」と、逆らわずに書いていく(同、287頁)。また、源氏と結ばれて数ヵ月後の雪の朝、源氏は末摘花の姿を見ようとして、格子を手ずから上げて、自分のそばに来るようにと声をかける。末摘花はためらっていたが、女房たちに催促されると、奥から出てきた。

「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」など教へきこゆれば、さすがに、人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、とかうひきつくるひて、ゐざり出でたまへり。(末摘花、292頁)

末摘花はもともと強情な性格ではないので、独身主義を説いた親の教訓に背いた今となつては、妻は「心うつくし」

(夫に従順である)が良い、と女房たちに教えられると素直に従っている。

ところが、次に末摘花が女性と話すのは蓬生の巻であるが、そこでは悉く進言に逆らい、そのため変貌したと見なされてきた。まず邸宅を手放してはどうか、と提言する女房たちに対しては、

「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわざはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み処と思ふに慰みてこそあれ」と、うち泣きつつ思しもかけず。(蓬生、328頁)

と、反応している。セリフの第一文「あないみじや。」で、即座に拒否している。その強気さは、今までには見られなかった。以下、売らない理由をはつきり述べている。それは外間を憚り(第二文)、宮家の誇りを重んじ(第三文)、親の形見を守り抜く(第四文)という、強い意志表示である。

続いて女房たちが、調度品を売って生活の足しにしようとする、末摘花はきつく戒めた。

いみじう諫めたまひて、「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあはれなること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。(蓬生、328頁)

末摘花の巻では女房たちに教えられていたのに、蓬生の巻では逆に女房たちに説教している。末摘花がこれほどまでに自分の意見を明示したのは、「亡き人の御本意」を死守するためである。末摘花の巻では独身主義に背いてしまつたが、それ以外は遺訓のままであった。だが蓬生の巻になると、末摘花が黙っているのは遺戒の基盤となる邸宅や調度品が無くなるうとしてしている。その切羽詰った状況において女房たちを阻止できるのは、もはや末摘花しかない。

わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。

末摘花が「心強く同じさまにて念じ」なければならぬ、という状況に立たされたのである。

「蓬生巻で末摘花が貧窮の極にあつて、なお父宮の屋敷やその形見の調度を手放さないと強い態度をとるのは、末摘花巻でうかがうことのできる父宮の末摘花に与えた指導に根ざすものであり、それを一心に守って生きてきた心のあらわれということができらうであろう。このように考えることによって、蓬生巻で、窮乏の極にあつて、父宮の屋敷やその形見の調度類を放そうとしない末摘花の強い態度が、本質的には末摘花の変貌でなかつたといえよう⁽⁷⁾。

たしかに末摘花の本質は変わっていないが、話す相手が異なることにも留意したい。末摘花の巻では源氏との対応が物語の中心であつたのに対して、蓬生で源氏が登場するのは巻末近くであり、それまでは女房たちや叔母との対話が続く。源氏と身内の女性とでは、話しやすさは異なる。

大宰府へ下る叔母から同行を求められ、侍従たちに勧められても、末摘花は拒み続けた。その理由は「父宮の靈の宿る屋敷を離れる気になれなかつたこと」と、「源氏の愛を信じていること」(注(7)の論文)である。そのため末摘花は叔母に対しても、自分の意思を明言した。

心とけても答へたまはず。「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとなむ思ひはべる」とのみのたまへば、(蓬生、340頁)

短いながらも、同行しない決意とその理由を言明している。ただし女房たちへのセリフ(前出)と比べると、言葉少なである。また、女房に対しては即座に拒絶したのに、叔母に向かつては、まずは社交辞令で「いとうれしきこと」

と述べている。話す相手によって、末摘花は拒み方を変えている。とはいえ、末摘花の巻における源氏との対応と比べると、別人のようである。しかし、源氏より身内の女性には話しやすいこと、また源氏に思いを述べないと邸宅などを失うような恐れはないのに対して、叔母には明確に意思表示しないと西国に連行される危機に陥るというのは、事態は全く異なる。話す相手や状況を考慮せず、両巻における末摘花の対話だけ一様に比較するのはナンセンスである。

五、末摘花の和歌

今度は、末摘花が自ら詠んだ和歌について考察する。巻別に列挙すると、以下の六首である。

- A からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつのみ（末摘花、299頁）
- B たゆまじき筋を頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる（蓬生、342頁）
- C 亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ（蓬生、345頁）
- D 年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか（蓬生、351頁）
- E きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして（玉鬘、137頁）
- F わが身こそうらみられけれ唐衣君がたもとなれずと思へば（行幸、315頁）

このうち半数にあたる三首に「からころも」の語が詠みこまれ、源氏を呆れさせている。源氏物語には「からころも」が八例みられ、すべて末摘花に関するものばかりである。「からころも」という言葉は、まさに末摘花を愚弄す

るためにだけ使われている、と言えよう。逆に「からころも」が用いられず、嘲笑の的になっていない和歌は、蓬生の巻にだけある。それは当巻のみ末摘花像が異なる、という通説に符合する。

しかしながら、この従来の見方も、詠歌状況を考慮せず一律に和歌を比較している。「からころも」の歌は、衣を贈与したときに添えられたものばかりである。一方、それ以外の歌には衣は出てこない。

末摘花の姫君が「唐衣」を詠み込んだ歌を贈ってくるのは、いずれも「衣」の贈答に関わってである。贈る品として「衣」があれば「唐衣」を詠んだかもしれないが、「衣」の贈答ではないのに「唐衣」を詠むという事実はありえない。そこまで教育のない人としては末摘花の姫君は描かれていないのである⁽⁸⁾。

よって、まず衣の有無を区別して、状況を把握するべきである。

和歌Eを見て、源氏は、

古体の歌詠みは、唐衣、袖濡るるかごとこそ離れねな。(中略)さらに一筋にまつはれて、いまめきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ妬きことはたあれ。(玉鬘、138頁)

と批判した。また、和歌Fに対しても源氏は、「かの人の立てて好む筋」(行幸、315頁)と評している。それほどまでに末摘花が「からころも」に執着するのは、衣を贈るときには必ず「から衣」を詠みこむ、と親に教えられたからであろう。末摘花のもとには、「常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子」があり、それには「和歌の髓脳い」ところせう、病避るべきところ多」く書かれていた(玉鬘、138頁)。その書には、衣服の贈与には「からころも」を詠む、と記されていたのであろう。この親から授けられた歌学書の教条を墨守する姿勢は、親から譲られた邸宅や調度品を手放さず守り通した態度(第四節)と共通する。蓬生の巻だけ末摘花の描写は異なる、と言われているが、

末摘花にとって人生の指針は一貫している。

蓬生の巻で衣を贈らないときは、「かの人の立てて好む筋」と源氏に揶揄された「からころも」の語を用いずに詠作している。末摘花が「からころも」を使用するのは、決して馬鹿の一つ覚えではない。末摘花は衣を贈るときと、それ以外とで、歌語を使い分けたのである。

蓬生巻の歌と他の巻に見える歌が何故こう違うのか、答えは簡単である。末摘花が父宮の髓脳によって詠んだ歌は古風だし、彼女自身の感情を基とする歌は素直である⁽⁹⁾。

このように詠歌状況が異なるのである。

六、衣装贈与の理由

では、なぜ末摘花は「からころも」の和歌を三首も詠み続けたのであろうか。それらはすべて、源氏に衣を贈ったときに詠まれた。この三回にも及ぶ衣装贈与の理由を考察する。

まず一回めは元日の装束で、これは本来、北の方が用意するものである。この当時、源氏の正妻は葵の上であるので、末摘花の出る幕ではない。にもかかわらず準備したのは、常陸宮家の女君が源氏と契りを結んだ以上、内妻であるわけがない、という自負によるものであろう。つまりこの贈呈は、宮家の威信に関わるのである。しかしながら、その意図は源氏には伝わらなかった。

源氏「とり隠さむや。かかるとわざは人のするものにやあらむ」とうちうめきたまふ。(命婦は) 何に御覽せさせ

つらむ、我さへ心なきやうにと、いと恥づかしくてやをらおりぬ。(末摘花、301頁)

末摘花に頼まれて衣を持参した命婦も、源氏と同じ考えであり、そのため末摘花の無神経さは際立つ。けれども常陸宮家では、非常識なことをしたとは夢にも思っていない。これは「親王家としては当然の礼儀を果そうとしていた」(注(9)の論文)のである。

源氏から援助を受ける身でありながら、その立場への配慮もなく、贈物をする判断力のなさを源氏は嘆くわけだが、正月には晴着を贈るべきものという仕来りを守ろうとする末摘花の律儀さのあらわれであろう。(注(7)の論文)

これは末摘花の発案ではなく、正室の役目として女房たちに教えられたのであろう。というのは、末摘花が贈った和歌や装束の方が、源氏から届いた返歌や衣装よりも勝る、と老女房たちは評価したからである(詳細は次節、参照)。

二回めは、源氏が調達した正月の衣装を運んできた使者への禄である。末摘花以外の女君たちにも晴着が届くと、「みな、御返りどもただならず、御使の禄心々なるに」(玉鬘、137頁)とあり、それぞれ使いの者に禄を渡している。よって一回めの時とは異なり、本妻でないのにと非難されることはない。しかしながら、

末摘、東の院におはすれば、いますこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきこととは違へたまはず、(玉鬘、137頁)

とあるように、二条東院に住む分際だと批判されている。このような立場を弁えない出過ぎた振舞いを仕出かしたのは、何事も「うるはしく」するため、すなわち使者には禄を出す仕来りを墨守しているからである。

三回めは、玉鬘の装着を祝う品である。秋好中宮をはじめ「御方々みな心々に」（行幸、313頁）競い合って用意しているのです、これも正妻だけの仕事ではない。しかし二回めの時と同様、二条東院に住む者は遠慮するべきなものと難じられている。

東の院の人々も、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、とぶらひきこえたまふべき数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことのをり過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎをよそのこととは聞き過ぐさむと思して、型のごとなむし出でたまうける。（行幸、313頁）

前回と同じく、「うるはし」の性格が災いしている¹⁰⁾。これに對して、源氏は玉鬘に向かつて、次のように述べた。

源氏「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、ひき入り沈み入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」とて、源氏「返り事は遣はせ。はしたなく思ひなむ。父親王のいとかなしうしたまひける思ひ出づれば、人におとさむはいと心苦しき人なり」と聞こえたまふ。（行幸、314頁）

「ものづつみ」は第二節で考察したとおり、末摘花の性質である。それなのに、このような出しゃばった行為を三度も繰り返すのは、「型のごと」行なう「古代の御心」によるものであり、これは「父親王」の教訓であろう。すなわち引つ込み思案であっても、故宮の遺訓どおりに実行に移す律儀さゆえ、作法どおりに衣を贈与し続けたのである。

しかしながら、一回めは本妻でないのに、二・三回めは東院にいる分際で行なつたため、愚弄された。しかし、もし父宮の存命中に末摘花が同じ事をしたならば、源氏も嘲笑しなかつたかもしれない。けれども、今や孤児であるにもかかわらず昔のままに振舞うので、その時代錯誤が檜玉に挙げられてしまう。蓬生の巻も、親の生前と同じであるようにと末摘花が孤軍奮闘して、それは賞賛的であった。蓬生の巻より後は末摘花の巻に戻り嘲弄される、と見な

されているが、末摘花自身はどの巻も昔ながらの生活を守り続けている。末摘花からすれば、父宮の教えどおりにしたにすぎない。ただ亡父の遺訓が時代を経て、世間の常識とずれてしまったのである。

周囲の価値観や基準とは異なった行動原理を有しているという点で、末摘花の人物像は一貫しているのである¹¹⁾。

末摘花の「行動原理」が賛美されたり（蓬生の巻）批判されたりする（他の巻々）ので、変貌したかのように見えるのである。

七、価値観の相違

末摘花が源氏を呆れさせた理由は、ほかにもある。それは贈られた衣が、三回とも源氏の趣味に合わない代物だからである。一回めは「今様色のえゆるすまじく艶なう古めきたる」、二回めは「山吹の桂の袖口いたくすすけたる」、三回めは「青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のためたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御小桂」であった。まず、どの衣も古すぎるのが難点であるが、これらは故宮ゆかりの品だからであろう。ゆえに古びた衣を源氏に贈るのは、「常陸宮の由緒を光源氏に付与する心づもり」であり、「末摘花における衣装の贈与は、常陸宮家の由緒という聖性の付与として考えることができる。」¹²⁾とも解釈される。

三回めの場合は、「青鈍」と「昔の人のためたうしける」も欠点とされる。テキストの頭注によると、前者は「祝儀なのに凶事用の色である「青鈍」を贈る無神経ぶり。」¹³⁾、後者は「当今はとても通用しない、の氣持。」である。

「昔の人のめでたうしける」の「昔の人」とは、故宮の時代の人を指すのであろう。その時代遅れに末摘花は気づいていないし、それを注意する女房もいない。それどころか老女房たちは、源氏よりも自分たちの方が趣味がよいと定めたほどである。

ありし色あひをわろしとや見たまひけんと思ひ知らるれど、「かれ、はた、紅のおもおもしろしをや。さりともしも消えじ」と、ねび人どもは定むる。女房「御歌も、これよりのは、ことわり聞こえてしたたかにこそあれ、御返りは、ただをかしき方にこそ」など口々に言ふ。姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、物に書きつけておきたまへりけり。(末摘花、302頁)

源氏からも衣装が届いたので、さすがの女房たちも源氏に贈った装束の色合いを「わろし」と思われたか、と反省している。けれども、源氏とは価値観が異なることを認めたくえで、

自分達の選択を自己弁護している。老女房達の選択眼は、父宮の好みに通じ、その好みは、末摘花に伝えられていたのであろう。(注(7)の論文)

と、あくまで宮家の伝統と格式を主張している。また、末摘花が源氏に送った自作の和歌を書き留めたことに注目すると、

老女房の自信に満ちた価値観に促される形で、末摘花は自作の和歌を書きつける。これは、老女房と同様に自身の価値観を肯定する末摘花の行為と受け取れる。つまり、末摘花と老女房は、同じ価値観を共有しているのである。(注(10)の論文)

と解釈できる。

このように常陸宮家の美意識も慣習も故宮の在世中のままで、いわば時間が止まっている状態である。末摘花の衣装の選択、贈与の慣例、詠歌の方法は、すべて父宮の教育による。そのため、当世のトップモードである源氏とは、ずれが生じてしまう。

末摘花は趣味が悪いとされる。重々しく筋目の正しいものをよしとする末摘花の趣味は、軽妙で洒落たものをよしとする光源氏のそれと比較すると、一時代前の美意識、つまり時代遅れの尚古趣味ということになる。旧来の美意識を尊重しつづける末摘花は、いにしえのものを大事とする姿勢を貫いており、ここにも不変を大事とする末摘花の深層が隠されているといえる。(注10の論文)

そのため二人の仲は平行線を辿るだけで、歩みよりは期待できない。一回めの贈与(末摘花の巻)に関しては、由緒を武器に、衣装に固執する古風な女性と、そうしたものにまだ無頓着な若い源氏に心の行き違いが問題なのである。由緒ある衣類とそれの持つ古くさは、表裏の関係である。流行おくれ、無風流ということは、裏返すと由緒である。(注12の論文)

と指摘されている。それは当巻のみに当てはまることではなく、時代の最先端をゆく源氏と、時が止まったままの末摘花との対比は、どの巻にも一貫して見られる。

八、末摘花の書

源氏を悩ませたのは、末摘花から届いた衣や和歌の質だけではない。その歌が書かれた料紙や書体も難じられた。

まず、三回に及ぶ衣装贈与の前に取り交わされた後朝の文について考察する。このときの和歌は侍従の代作であるが、手紙は本人が書いた。

紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。(末摘花、287頁)

「紫の紙」は恋文にふさわしいが、古すぎて色あせているのが難点であり、これは源氏に贈った衣装の古さと共通する。おそらく父宮が用意した料紙であろう。「中さだの筋」とは「少し古い時代」(テキストの頭注)で、故宮の頃を指す。和歌と同じく書も父宮に教わったため、男性的で「文字強う」(しっかりした筆づかい)になったのである。すなわちも筆跡も書風も、父親譲りである。衣装や詠歌と同様、書も父宮の時代を反映している。

また、「上下ひとしく書いた」とは、行頭と行脚を揃えて書いた、という意味である。すると「文字強う」とは、一字ずつ放して崩さずに書いたのであろう。恋文に限らず、仮名書きの手紙はふつう、文字を続けて書き、全体を散らして書くものであるが、これはそうではない。その理由は二通り考えられる。一つは「中さだの筋」では、まだ連綿体や散らし書きが発達していなかったからである。もう一つは、後朝の文を末摘花は正式な結婚手続きと捉え、公的な書き方をしたのではなからうか。たとえば当時の古文書は、「文字強う」「上下ひとしく」書かれている¹⁴⁾。よって、末摘花はこのような書き方しかできない、と決めつけるのはナンセンスである。私的な手紙ではなく婚礼に関わる公的な手紙にふさわしい書き方を、末摘花は選んだのである。

次に末摘花が源氏に文を送ったのは、一回めの衣装贈与のときである。そのとき末摘花は初めて自作の和歌を源氏に贈り、それを紙に書き留めた。

姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、物に書きつけておきたまへりけり。(末摘花、302頁)

人に贈った和歌をわざわざ書き残す、という普段しないことをしたのは、物語本文によると苦心の作だからとある。末摘花が源氏に贈った、最初の記念すべき自詠なのである。そのほかの理由を推測してみよう。この元日用の装束を調えるのは正妻の仕事であり、その意味では公的な任務で年中行事の一つでもある。すると、その衣に添えられた和歌もまた、公式なものである。よって男性貴族が行事について日記に記すように、末摘花も和歌を記録したのではなかろうか。

また、その和歌を源氏に贈ったときに記した料紙にも注目したい。それは「陸奥国紙の厚肥えたる」であった。従来は、「懸想文には薄様の色紙を用いるのが普通で、これは無趣味である。」(テキストの頭注)のように、末摘花を愚弄する対象として見なされてきた。しかし、これを公式な書状と解釈すると、評価が変わってくる。

『源氏物語』では、陸奥紙の語が十例見えており、その内九例までは消息で、末摘花の二例を除いていずれも実用的な内容である¹⁵⁾。

末摘花は本妻として、源氏に送る歳末の手紙にふさわしいものとして、実用的な紙を選んだのである¹⁶⁾。

二回めの衣装贈与も、使者への禄という慣例に基づくものであるから、返歌を記した料紙も、「いとかうばしき陸奥国紙の、すこし年経、厚きが黄ばみたる」(玉鬘、137頁)であった。陸奥国紙は真っ白なのが良しとされたので、「黄ばみたる」はいただけくないが、これは故宮が入手したものであるから、やむを得ない。正式な書状には父宮が用意した紙を使う、と教えられていたのであろう。そして、「御手の筋、ことに奥よりにたり。」(同)と筆跡も古風であるのも、父宮のを手本にしたからかもしれない。陸奥紙の文献上の初出は、『蜻蛉日記』天延二年(九七四)の兼

通の恋文とされている¹⁷⁾。すると常陸宮は当時、「高級で流行の先端であった」(注17の論文)美しい地方紙である陸奥紙を姫宮に残した、と考えられる。

三回目ときは、料紙に関する記述はない。筆跡については、「御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫り深う、強う、固う書きたまへり。」(行幸、315頁)とあり、これもまた非難的にされている。しかし末摘花にとつては、玉鬘の装着を祝う品に添える和歌である以上、走り書きではなく、崩さずしっかりと放ち書きで記すという意識が働いたのであろう。

以上により、後朝の文と衣装贈与の手紙において、料紙も和歌の書き方も、公式な書状にふさわしいものが選ばれている。源氏物語には末摘花が私的な手紙を書いた記述はないが、もし末摘花が自由に書いたならば、それは薄様な色紙に連綿体の散らし書きだったかもしれない。末摘花は陸奥紙に上下そろえて崩さず放ち書きしかできない、と決めつけ嘲笑するのは早計に過ぎよう。

九、末摘花の環境

常陸宮が末摘花のために用意したのは、陸奥紙だけではない。「唐櫛笥」(末摘花、304頁)、「御唐櫃」(蓬生、349頁)など、邸内には唐物が数多くあった。また「秘色やうの唐土のもの」(末摘花、290頁)は越州窯の青磁器であり¹⁸⁾、末摘花が着ていた「黒貂の皮衣」(末摘花、293頁)は「渤海の代表的な特産物」¹⁹⁾である。このように末摘花の周りに舶来の高級品が充満していたのは、「常陸宮が唐物を好み、多く入手しようとするような立場にあった」(注18の論文)から

であり、「父宮の時代の最高の洗練」(注(1)の論文)で邸宅は飾られていたのである。

調度品には公式なものと私的なものがあり、前者は中国風様式で正統、後者は和風で略式と区分される²⁰⁾。そのため正式な儀式では、唐物が使われた。たとえば朱雀院が女三の宮の装着の儀を執り行ったときは、舶載の品々で埋め尽くされた。

御しつらひは、柏殿の西面に、御帳、御几帳よりはじめて、このの綾、錦はませさせたまはず、唐土の後の飾りを思しやりて、うるはしくことごとしく、輝くばかり調へさせたまへり。(若菜上、42頁)

この有様は、常陸宮邸に通じる。ということは常陸宮は、禁裏の晴れの様式を自邸に取り入れ、正統な宮廷文化を再現したと解釈できる。すなわち宮にとって、私邸は第二の皇居なのであろう。ことによると宮は末摘花を入内させるために、お后教育を行なうにふさわしい場を作り出したのかもしれない。

常陸宮の生活指導は姫宮のみならず、女房たちにも及んだ。

いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶ひき結ひつけたる腰つきかたくなしげなり。さすがに櫛おしたれてさしたる額つき、内教坊、内侍所のほどに、かかる者どものあるはやとをかし。(末

摘花、290頁)

櫛を挿す風習は、今では内教坊か内侍所でしか見かけない、と源氏は思っている。内教坊とは、女楽や踏歌を教習する所で、唐楽が演奏される唐風な役所である。源氏物語ではもう一箇所、用例があり、浮舟の継父が愛娘の音楽教師を内教坊から呼び寄せている。

琴琵琶の師として、内教坊のわたりより迎へとりつつ習はず。手ひとつ弾きとれば、師を起居たちら拝みてよろこび、祿を取らすること埋むばかりにてもて騒ぐ。はやりかなる曲物うまものなど教へて、師と、をかしき夕暮などに、弾き合はせて遊ぶ時は、涙もつつまず、をこがましきまでさすがにものめでしたり。かかることもどもを、母君は、すこしものゆゑ知りて、いと見苦しと思へば、ことにあへしらはぬを、「あこをば思ひおしたまへり」と、常に恨みけり。(東屋、21頁)

この場面においても末摘花の例と同様、貴族の美意識とは異なり、擲揄される対象のなかに内教坊が使われている。一方、内侍所は天照大神の靈代である神鏡を安置する所で、次の『更級日記』の記事が参考になる。

内裏の御供に参りたるをり、有明の月いと明きに、わが念じ申す天照御神は内裏にぞおはしますなるかし、かかるをりに参りて拝みたてまつらむと思ひて、四月ばかりの月の明きに、いとしのびて参りたれば、博士の命婦は知るたよりあれば、灯籠の火のいとほのかなるに、あさましく古い神さびて、さすがにいとようものなど言ひひたるが、人ともおぼえず、神のあらはれたまへるかとおぼゆ。(小学館、新編日本古典文学全集、331頁)

内侍所に仕える博士の命婦が、まるで神のように思われたという一節から、俗世間から掛け離れた神聖な雰囲気が見える。源氏も常陸宮邸の女房たちに対して、世間一般とは違ふと感じている。このように末摘花に仕える女房たちを、内教坊や内侍所の古式を守る女官たちのように仕立てたのは、父宮であろう。これも自邸を宮中のようにする政策の一環である。

そのうえ末摘花の仕草までもが、源氏の目には大宮人のように映った。

いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もちおほ

えて、さすがにうち笑みたまへる気色、はしたなうすずろびたり。(末摘花、294頁)

テキストの頭注・訳によると、「儀式をつかさどる官人」が「格式ばって、笏を持ち、肘を張って」「練り歩きだしたときの肘の構え」に、末摘花の所作は似ているのである。このような若い姫宮に不似合いな振る舞いを躡けたのは、やはり父宮であろう。故宮は一人娘に、最高級の唐物で飾り立てた晴れの場にふさわしい、正式な身のこなしを教えたのである。

しかしながら時代とともに価値観も変り、源氏の頃になると、常陸宮の美意識は時代遅れになってしまった。そもそも末摘花は、「故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ」(末摘花、266頁)とあるように、父宮の晩年に生まれたので、親子といっても年齢は一代以上、離れていたと思われる。したがって末摘花からすれば、祖父の代の規範を習ったことになる。そのうえ『源氏物語』の時代は、「非正統とされた和風のデザインこそが、日本の調度の典型として、その後のわが国の調度に決定的ともいえるような大きな影響を及ぼしていくことになった」(注20の論文) 転換期に当たるので、当世風の源氏にとって、末摘花の趣味・趣向はかなり昔のものになってしまった。そのため源氏には、末摘花の儀式官のような動作は「ひなび古めかしう」見えてしまう。また舶来の「黒貂の皮衣」も、

古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそほひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。(末摘花、293頁)

と、最高級の毛皮までもが若い女性には不似合いと見なされている。それは古風であることと、主に男性用の衣装であることによる。これを着た姫宮が儀式官のように振る舞うと、官人のように見えてしまうのである。そういうば末

摘花の筆跡も男性的であり（第八節）、父宮の教育方針は女性的ではないと言えよう。これは故宮の時代に正統とされた唐風は、男性性を帯びているからであろう²²。

源氏は末摘花に仕える女房たちを見て、「内教坊、内侍所のほどに、かかる者どものあるはやとをかし。」（前出）と感じた。源氏には常陸宮邸の様子が、何もかも古くさくて「をかし」（滑稽）に思われるので、その主人である末摘花も嘲笑されている。しかしそれは、あくまで源氏の目から見た評価である。父宮の存命中は正統な宮廷文化であったが、その死後は価値観が変り、常陸宮邸は昔の晴れの世界のまま世間から取り残されてしまったため、当世の美意識で計ると古風に見えてしまうのである。

十、晴れと褻の相違

常陸宮の邸内は、宮の生前も死後も変わらず、それは蓬生の巻でも同じである。

かくいみじき野ら藪なれども、さすがに寝殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず、つややかに掻い掃きなどする人もなし、塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひにて明かし暮らしたまふ。（蓬生、330頁）

また、末摘花の筆跡も一生、変っていない（第八節）。にもかかわらず蓬生の巻が他の巻々と異なるように見えるのは、何故であろうか。その一因として「視点の転換」が考えられる。末摘花の巻と蓬生の巻とでは視点が異なり、前の巻では「ほとんど一方的に、光源氏の視点から描かれてゆく」のに対して、後の巻では「光源氏の眼を通さず、作者の視点から、末摘花を直接描写する」と、視点が転換している²³。そのため末摘花が変貌したかのように見えるの

である。たとえば末摘花が源氏に衣装を贈ったのは、「源氏に困り者として嘆かれる視点で取りあげられた律儀さ」ゆえであるのに対して、蓬生の巻で侍従に餞別を渡したのは、「末摘花の美点に視点を向けた時の律儀さ」であるように（注(7)の論文）、末摘花自身は変化していない。そして後の巻々では、再び源氏の視点に戻っている。

ただしその考え方は、末摘花の和歌には当てはまらない。なぜなら詠み方も蓬生の巻は他の巻と異なるとされるが、視点が変るわけではないからだ。蓬生の巻のみ「からころも」を詠み込まないのは、当巻のみ衣を贈らないからである（第五節）。そこで当巻で詠まれた三首（第五節に列挙した和歌B〜D）を順に見ていこう。まず一首めは、筑紫に下る乳母子の侍従に送られた。このときの餞別が衣装ではなく、鬘と香の壺であったのは、「形見に添へたまふべき身馴れ衣もしほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて」（蓬生、341頁）による。その後の巻々では源氏に衣を贈与しているので、源氏には「身馴れ衣」ではなく、古くなつてはいるが一度も着ていない新品を選んだのであろう。もし侍従に衣を贈っていれば、「からころも」の和歌を詠んだであらう。二首めは独詠歌、三首めは源氏への返歌であり、衣は用いられていない。

この三首を「からころも」の和歌と比べると、詠み方はたいして変らない、と山本利達氏は評された。氏によると、一首めは「多くの縁語で仕立てられ」「古風さを感じさせる歌いぶり」、二首めは「亡き人を恋う固定的な詠みぶり」、そして三首めは「型にはまった返歌」「型通りの返歌」である（注(7)の論文）。しかしながら詠歌方法は同じでも、詠歌状況は異なる。

詠歌状況から考えるのならば、蓬生巻の歌がすべて場の歌であることに注目したい。他の巻における歌Ⅱ「唐衣」歌はすべて消息文でのもので、相手は光源氏（玉鬘の君の裳着の祝いにつけた歌もあるが、内容的には光源氏に

あてたものである)である。末摘花の姫君は光源氏へ贈る消息の歌の時には「和歌の髓脳」に則って「きちんと」考えて作歌しているのではないであろうか。ところが対面の場ではそのような「和歌の髓脳」に則って考え込んでいては歌が返せない。蓬生巻での末摘花の姫君は高揚した思いのままに詠出しており、そのためその時の心情が添った歌となっているのだと読みとっておきたい。(注(8)の論文)

「からころも」の和歌は、正月の装束・使者への緑・裳着の祝儀に添えられたもので、いずれも礼儀作法に従い詠まれている(第六節)。それに対して蓬生の巻のは、すべて私的な詠歌である。「からころも」歌は晴れの場、それ以外は褻の場で詠まれたので、詠み方が異なるとまとめられる。すなわち末摘花は和歌の詠み分けをしたから、別人が詠んだように見えると解釈できよう。言い換えると、末摘花は二種類の詠み方ができるのである。

おわりに

蓬生の巻に描かれた末摘花が他の巻と異なるように思われる理由を列举すると、以下の通りになる。

- 1、視点が異なる。(第十節)
- 2、源氏より女性との対話が多い。(第一・三・四節)
- 3、衣装を贈らないので、「からころも」の和歌を詠まない。(第五節)
- 4、晴れの歌はなく、褻の歌ばかりである。(第五・六・十節)
- 5、世間との価値観の相違が、当巻のみ非難されない。(第六・七・九節)

6、和歌を口ずさんだので、筆跡や料紙は評価されない。(第八節)

このように蓬生の巻には他の巻と異なる条件がいくつも重なった結果、別人のように見えるのである。

作者の人間理解という点からは、登場人物それぞれは、同一人物にふさわしい性格や言動をもったものとして、多角的に描写しているといえるのではないかと思う。(注(7)の論文)

これは決して特殊なことではない。たとえば対人恐怖症であっても、家族とはふつうに話せる人もいる。その場合、他人から見れば無口でも、家庭内ではそうではない。末摘花の二面性も、そのように理解できる。また、公式な書状と友人宛の打ち解けた手紙とでは、同じ人が書いても、内容や文体のみならず書風までもが異なる。従来は晴れと曇りのような状況の相違を考慮せず、一律に末摘花の言動を比較してきた傾向があるが、今後は場の状況にも配慮しなければならぬ。

注

- (1) 原岡文子氏「末摘花考―靈性・呪性をめぐって―」、「日本文学」平成一七年五月。
- (2) 池田利夫氏「蓬生・関屋」、「源氏物語講座」3所収、有精堂、昭和四六年。
- (3) 武原弘氏「末摘花論―変貌問題をめぐって―」、「日本文学研究」17、昭和五六年一月。
- (4) 源氏物語の本文と頁数は、小学館の新編日本古典文学全集による。
- (5) 源氏物語には「(御)ものづつみ」が全部で二二例ある。その内訳は末摘花に四例、源氏が話した女性論に二例、そして夕顔・明石の君・落葉の宮・宇治の中君・浮舟とその乳母に一例ずつある(ただし乳母は「ものづつみせず」と打消し)。よって人物別では、末摘花が最多である。
- (6) 藤原克己氏「古風なる人々」、「むらさき」16、昭和五四年六月。

末摘花の二面性

- (7) 山本利達氏「作者の人間理解―末摘花を中心に―」、『源氏物語の探究』10所収、風間書房、昭和六〇年。
- (8) 椎橋真由美氏「源氏物語作中歌攷―末摘花の姫君(二)―」、「東洋大学大学院紀要(文学研究科)」41、平成一七年三月。
- (9) 坂本昇氏「末摘花の生き方―親王の女(二)―」、同氏著『源氏物語構想論』四五七頁、明治書院、昭和五六年。
- (10) 外山敦子氏の調査によると、源氏物語で「うるはし」が最も多用される人物は夕霧で、一一例ある。次いで多いのは末摘花で七例あり、その内訳は蓬生の巻に四例、玉鬘の巻に一例、行幸の巻に二例である(同氏「末摘花は変貌したのか―老女房との関係性から―」、「愛知淑徳大学国語国文」20、平成九年三月。後に同氏著『源氏物語の老女房』所収、新典社、平成一七年)。この言葉においても、末摘花はどの巻も一貫して同じであることが確認される。
- (11) 吉田幹生氏「蓬生巻の末摘花―物語の方法と複眼的視点―」、「古代中世文学論考」6所収、新典社、平成一三年。
- (12) 佐伯雅子氏「末摘花と衣の贈与」、「平安文学」というイデオロギー」所収、勉誠出版、平成一一年。
- (13) ただし末摘花も、青鈍が祝儀の品に相応しくないことを知っていた、と見る解釈もある。
- (14) ここでは喪服まで差し出す。これは非常識ではあるが、実はこの時点でもう既に末摘花には、贈与すべき対象となる衣装を持ち合わせていないのである。宮家の由緒を付与する最後の手段である。末摘花も青鈍が不釣り合いなのを承知して、埋め合わせるべく、普段着を付ける。(注(12)の論文)
- (15) この青鈍などは、「よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れたまへり。」であった。贈物にする衣は無くても、衣箱は「よき」ものが残っており、包み方も作法に適っており、さすがに由緒ある宮家のことはある。たとえば、宇治の中君の婚礼を祝して薫が贈物をしたとき、大君にあてた手紙は恋文の体裁を避けて、「陸奥国紙に追ひつぎ書きたまひて」(陸奥国紙に行頭を揃えて端から順にお書きになり)(総角、274頁)であった。
- ちなみに平安時代の古筆のなから末摘花の書に似たのを探すと、伝小野道風筆「秋萩帖」が挙げられる。第一紙に記された和歌二首の書風は十世紀頃で、「仮名の歴史上、男手(万葉仮名)から女手(平仮名)へ移行する過渡期の草仮名の遺品として貴重。」(『日本書道辞典』二玄社、昭和六二年)と評される。両首とも天地を揃え、ほとんど放ち書きで、連綿体はあまりない。中世になると和歌懐紙の正式な書き方は、上下を揃えて三行三字と定められる。
- 伊井春樹氏「うたことば「からころも」考―源氏物語末摘花詠歌の史的背景―」(大阪大学文学部「日本語・日本文化研究論集」3、昭和六〇年一二年。後に同氏著『源氏物語論とその研究世界』所収、風間書房、平成一四年)。

(16)

陸奥紙は『西宮記』『権記』等によると上表文に使用されていたので、「堅苦しい印象」がある一方、『宇津保物語』『かげろふ日記』『枕草子』では恋文にも使われている（坪井暢子氏「源氏物語における陸奥紙について―物語中の消息文に関する研究の一環として」、お茶の水女子大学「人間文化研究科」16、平成五年三月）。すると源氏物語における陸奥紙の用法は、特殊であるかもしれない。

そこで、源氏物語における用例を見ると、末摘花に関わるのは三例あり、そのうちの二例は本稿で取り上げた手紙である。もう一例は、末摘花が見ていた歌集に使われている（蓬生）。これも父宮の遺品ならば、そこに記された古歌と同様、陸奥紙は古風さの象徴を担っている。このほか明石の入道の願文（若菜上）も、内容は遺言書という実用的なものである。陸奥紙は「厚手で破けたりしないので」「薄様」よりも紙質が強く、保存にも適している」（注17の論文）ので、常陸宮や明石の入道は子孫に残すため、陸奥紙を選んだのであろう。

このほか男女の間で恋文ではなく、事務的な書状に見せるために使われた例が三つある。すなわち玉鬘が源氏の思いに気づかぬ振りをしたとき（胡蝶）、薫が自分の思いを隠したとき（総角）、宇治の中君が薫に用事を依頼したとき（宿木）である。

以上の七例は、恋文にふさわしくない紙という通釈に適う。しかし他の三例は、すべて恋文である。それはa雲林院に籠った源氏が紫の上へ送る（賢木）、b明石の入道が娘に代わって源氏へ返歌する（明石）、c病床の柏木が出家した女三の宮へ送る（橋姫）である。bはまだ源氏が明石の君を訪れる前であるが、aとcは契りを結んだ後である。ただしcは相手が尼になった以上、恋文の定番である薄様の色紙は使えないので、人目をこまかすため陸奥紙を選んだのかもしれない。するとaは寺院から色紙を送るのを憚って、bも出家人が恋文を書くのをカモフラージュするため、と解釈できる。結局、この三例に共通するのは仏教色である。

以上をまとめると、当時は上表文にも恋文にも使われていた陸奥紙を、源氏物語では実務用と定め、恋文ではないことを主張するとき、あるいは恋文であることを隠すときに利用した、となる。

(17)

川村裕子氏「和歌における装飾―『蜻蛉日記』『源氏物語』の「陸奥紙」再見―」、兼築信行氏・田淵句美子氏編『和歌を歴史から読む』（笠間書院、平成一四年）所収。

(18)

河添房江氏「末摘花と唐物―唐櫛笥・秘色・黒貂の皮衣―」、『想像する平安文学』2（勉誠出版、平成一三年）所収。

末摘花の二面性

末摘花の二面性

- (19) 金孝淑氏「末摘花における『唐』」「黒貂の皮衣」と「からころも」」、「平安朝文学研究」復刊9、平成二二年二月。
- (20) 小泉和子氏「和風調度の成立」、同氏著『室内と家具の歴史』（中央公論社、平成七年）所収。
- (21) 「〈唐〉」「公」「男性性」、〈和〉」「私」「女性性」、という基本構図」を、千野香織氏は提唱された。同氏「日本美術のジェンダー」、『美術史』136、平成六年三月。
- (22) 栗原和子氏「末摘花その変貌といわれるものについて」、東京女子大学「日本文学」42・43合併号、昭和五〇年三月。